Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-04

情報伝達メディアの性質 ： 感染症にまつわる情報伝達の比較から（二〇二一年度　社会調査演習報告）

崎山, 航志

(Citation)
社会学雑誌,39:263-274

(Issue Date)
2022-11-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100482592

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482592

二〇二一年度　社会調査演習報告

情報伝達メディアの性質

――感染症にまつわる情報伝達の比較から――

崎山航志
神戸大学文学部人文学科

一　目的と方法

本稿では、感染症の流行に際してのメディアによる情報伝達について、時代や地域の異なる様々な媒体を対象として比較検討し、各種情報伝達メディアの性質およびその時間的・空間的変化について考察する。

メディアの性質について着目するきっかけとなったのは、安保則夫『ミナト神戸　コレラ・ペスト・スラム　社会的差別形成史の研究』において分析対象として用いられていた「神戸又新日報」である。「又新」を市内の文書館で閲覧できると知り、実際に明治期の新聞の感染症に関する記事を読んでみると、現代の新聞やその他メディアとは情報の取り扱い方が異なっており、メディアとして異なる性質を持っていると感じたことから、メディアの性質の変遷について調べてみようと思い立った。

調査方法としては、明治期の新聞における感染症に関する内容の記事について詳細に検討した後、現代の新聞が取り扱う内容との差異について検討する。また、さらに新しいメディアとして、ＳＮＳとの比較も試みる。検討に用いるメディアは、第一に「神戸又新日報」である。神戸又新日報は、明治一七年から昭和一四年まで神戸市内において発行されていた新聞で、神戸市街やその近辺の比較的狭い地域に関するニュースを取り扱い、明治一九年のコレラ流行にあたってはコレラに関する情報を多く発信していたものである。又新日報の記事については、神戸市文書館に所蔵されている紙焼き製冊版を閲覧し、必要箇所のみを抜粋して用いることとする。なお、印刷が不明瞭で判読不能な箇所は、（判読不能）と表示する。続いて、同様の時代に

おける発行範囲の異なるメディアについて検討するため、明治一九年に東京や大阪で刊行された新聞のコレラに関する記事にも着目する。ここで取り上げるのは「燈新聞」「東京日日新聞」「朝野新聞」「毎日新聞」の四種の新聞であり、それぞれの新聞の詳細については「三-二　明治期の新聞」において後述する。そして、時代と射程の異なるメディアとして、現代の全国紙に着目する。明治期のメディアにおける感染症関連報道について検討したことと内容上の整合性をとるため、現代のメディアでは、二〇一九年末期から世界中で猛威を振るった新型コロナウイルス関連の新聞記事について検討する。新聞記事の閲覧には読売新聞オンラインおよび朝日新聞記事データベースを利用する。

二　新聞というメディア

具体的なメディアの分析に入る前に、社会学において新聞というメディアがどのように取り扱われてきたのかについて、マーシャル・マクルーハン（Marshall McLuhan）の古典理論と、比較的現代に近い日本の状況について整理する。

マクルーハンによれば、新聞というメディアは「多様な情報を、一枚の紙面にモザイク状に配列した」メディアであり、「多様な情報を並列して日々社会へ暴露」している。そのようにして、共同体内で囁かれるニュースに対する興味をかき立てる点で、新聞は人々の「公共的参加を促す集団的な告白形態」であるといえる（McLuhan, 1964=一九八七：二〇八）。そのように考えると、新聞は社会の暗部をいたずらに掘り起こす埒もないメディアであると錯覚するが、「紙面の密度を高めて読者の参加をうながすには、悪いニュースがなければならない」（McLuhan, 1964=一九八七：二一四）のであり、そもそも新聞を告白形態たらしめているのは、「公衆を呼びかけの対象としてもち、正確な画一性と反復可能性をそなえた高密度の印刷という形態」（McLuhan, 1964=一九八七：二一五）であるともいえる。新聞はその初期において、「噂話や口づての話の過ちを正す」ことを目的としており、やがてニュースを「作るべきもの」として認識するようになってきた（McLuhan, 1964=一九八七：二一六）。そうした中で、共同体内のほとんどすべての情報を材料としてモザイク状に並べ、作為的に作り出したニュースを毎日発信するようになり、結果的に共同体イメージの確立に寄与するのである。

もっとも、マクルーハンが『メディア論』を著したのは一九六四年のことであり、その上マクルーハンは海外で活躍した学者である。現代日本における新聞はどのように扱われているのだろうか。

遠藤知巳によると、現代とはいえ一〇年以上も前の記述であるが、日本の新聞発行部数は中国に次ぐ世界二位、新

聞普及率はアイスランド、ノルウェーに次ぐ世界三位というデータがある（遠藤編、二〇一〇：三五二）。しかし、一九九七年以降は総発行部数・世帯あたりの部数がともに逓減傾向にあるようであり（遠藤編、二〇一〇：三五三）、現在でもこの傾向は続いている、もしくは加速しているであろうことは想像に難くない。新聞というメディアの性質については、遠藤もマクルーハンと似通った説明をしており、「広報性の強い基調のうえでときおり突出する言論的主張と、多様な人々の言論の引用や再録。この両面で、日本の大新聞の紙面は独特のパッチワークとなる」（遠藤編、二〇一〇：三五五）。ここで意識されているのは、ある出来事に対して新聞上に掲載される記者の主張や専門家の語りであり、一般的なニュース記事とは性質の異なるものであるが、「新聞社の無理なタテマエ的『主張』が鋭く槍玉にあげられる一方で、『ソース』としての中立性は妙に通用しつづけている」（遠藤編、二〇一〇：三五四）とあり、記事内容についての信憑性もある程度担保されているという性質が見て取れる。

ひとまず現代日本の新聞は、多様な情報が継ぎ接ぎ状に（モザイク状に）並べ立てられ、ある程度正確な情報を人々に伝えるメディアである、と結論づけられる。

三　各種新聞についての分析

三・一　神戸又新日報

安保則夫による記述では、コレラが流行している時期の又新日報の記事内容は、大きく①「コレラ防疫（検疫、交通遮断、消毒・清潔法等の実施）」に関するもの、②「県会・区会・町会等、行政の対応（衛生費、各種取締令規、告示・告諭の発布等）」に関するもの、③「コレラ・衛生問題をめぐる世論（社説、投書、その他記事）」に関するものの三つに分類されており、①と②に関しては、総じて当時の衛生状態に対する問題意識が見て取れる（安保、一九八九：六〇―七三）。又新における情報伝達について特質的なのは、③に関する記事である。

現代の投書欄にあたる「寄書」欄を見ると、多数の投書が寄せられており、当時の人々がコレラに対して高い関心を持っていたことが窺える。さらに内容を見ると、当時の新聞が①や②のような公的な報知の他に、市民の声を拡散する機能も持っていたこともわかる。

「井水検査」

今般其筋より当区内にて昨年虎列刺病を発生したる人家及其近傍の井水検査を始められ今正さに着手中のよしなるが之れは誠とに美事と申（判読不能）の外無

之候（判読不能）かるに生の考へにては唯昨年虎列刺病を發したる人家の井水のみを検査さる、も余りに其効は無之と奉存（判読不能）問（判読不能）もの事には何卒区内一般の井戸に就て其水の性質を検査し他日悪疫流行の媒介ならざらしめんことに御注意有之度左無く志て唯已に発生したる虎列刺病の源因等を取調へらる、に止まれば折角の御骨折も余りに其宝効を将来に奏（判読不能）間敷と被存候依て此段貴社に訴へ当局者の参考に供し候（『神戸又新日報』一八八六年四月二五日）

「通俗衛生演説会の開会を望む」

虎列刺病流行の為め已に諸興行を停止せられたる上は定めて諸演説会等も差止めらる、事ならんなれ共目下世人をして衛生の大切なるを知らしめさる可からさる際通俗衛生会の開場甚た必要と被存候間此種の会に限きり政府は特別に之を人民に許可し区内各劇場にて衛生演説会を開き一般に傍聴を許るして悪疫予防等に（判読不能）せる事項を知らしめんこと小生の切に希望する所に御座候早々頓首（『神戸又新日報』一八八六年五月二八日）

以上に挙げた二つの記事は、市民の立場から防疫政策について意見を述べるような内容の投書である。「井水検査」は、コレラが発生した家庭およびその近隣家庭の井戸水検査を行っていた市あるいは区の当局に対し、より広範に及ぶ領域での検査を求めたものである。井戸の構造について詳しくは知らないが、カナートのような横井戸であれば異なる家庭で一つの水脈を共有している状況もあり得るわけであり、真なる感染防止を求める上ではこの投書は当然の訴えをしているといえる。「通俗衛生演説会の開会を望む」は、市民に対し防疫の必要性を説く演説会の開催を要求したものである。記事の内容は公的機関に対する防疫強化の訴えに見えるが、この記事を見た他の市民に防疫の重要性を知らしめることも可能であるように思われる。

「私立避病院は如何なりしや」

去年頃の又新日報を見るに神戸部の（判読不能）師諸君は今回私立避病院を設立せんとの計画ありし由を記しありしに小生は此事に付き其後何の音沙汰も聞く能はす右は已に立消へとなりし事か若し之を設立する事ならば今日こそ最も其好時（判読不能）なり（判読不能）際上の御都合如何医師諸君に御質問も申上候也（『神戸又新日報』一八八六年五月二八日）

「私立避病院の設置云々に答ふ」

又新日報第六百十一号に私立避病院は如何なりしとの投書に答ふ右は場所も適当の地を求むるに因て其筋へ相（判読不能）りし所至極好都合なり左れど規則の一段に至り（判読不能）主のみ入院治療するは甚た狭き区域にして貧富を問はず一般に治療する規則なれは許可なる趣に聞及ぶ故に今に至り（判読不能）延すと聞く（『神戸又新日報』一八八六年六月一日）

以上の二つは、異なる号の投書欄上で質問―回答の形式をなしている一連の記事である。前者が、コレラに感染した患者のための避病院を設置するという計画の現在について質問を投げかけ、後者が、設置場所について問題が生じたために設置が先延ばしになっている旨を回答している。共通の紙面を多人数が目にするのみならず、紙面を通してコミュニケーションを図ることも可能であったのは、又新における興味深い特徴の一つである。

三-二　明治期の新聞

次に、明治期に刊行された新聞のうち、神戸又新日報以外のものについて取り上げる。取り上げる新聞は、「燈新聞」「東京日日新聞」「朝野新聞」「毎日新聞」の四種である。燈新聞は、自由党の機関紙を源流としたもので、この名称で発刊されていたのは明治一九年の一年間のみである。後に買収されて「東京朝日新聞」となったが、これは現在の「朝日新聞」の前身にあたる。東京日日新聞は、東京で初めて刊行された日刊紙であり、「大阪毎日新聞」の傘下に入った後に現在の「毎日新聞」となる。朝野新聞は、民権派の政論新聞として人気を博したが後に廃刊となる。毎日新聞は、「東京横浜毎日新聞」を前身とする新聞で、現在の毎日新聞とは無関係である。後に「帝都日日新聞」に吸収され、一九七〇年頃廃刊となる。なお、今回の調査では、実際に発行された新聞を見ることはできなかったため、明治期の新聞記事を切り抜いて時代ごとの出来事を総覧できるようまとめた書籍『新聞集成明治編年史』から引用する形を取った。同書は国立国会図書館デジタルコレクションから閲覧可能である。

上に挙げた明治期の新聞にしても、三-一で述べた又新の記事内容分類と同様の分類が可能であるように思われる。すなわち、①「コレラ防疫」に関するもの、②「県会・区会・町会等、行政の対応」に関するもの、③「コレラ・衛生問題をめぐる世論」に関するものである。

「コレラ予防大評議　大日本私立衛生社が三百名集会して」

同会にては目下京阪地方にコレラ病流行、最早や何時何地に伝播するやも図り難き状態なれば右予防に関

する事項協議の為め、一昨六日木挽町の厚生館に於て臨時会を開き、会頭佐野常民、副会頭長与専斎、幹事高木兼寛、大沢謙二等の諸氏を始め無慮三百余名出席して、予防消毒法の事は勿論同会社が社会に対する義務上の事をも夫れく熟議せられたる由。（『新聞集成明治編年史』第六巻：一七三、『燈新聞』一八八六年六月八日）

これはコレラ予防の為の会議が開催されたことを報じる記事で、具体的な防疫策について記述があるわけではないが、広く防疫関連の情報という点では①「コレラ防疫」に関する記事であるといえる。

「兵士禁食令　コレラ予防の為外出して飲食は厳禁」
目下悪疫流行の兆あるに付ては、諸兵士にして遊歩又は公用等にて他出せし時妄りに飲食等をなすときは、該病を発するの恐れなしとせざれば、其予防をなさゞるべからずとて、今度禁食令と云ふものを制定せられしと（『新聞集成明治編年史』第六巻：一七九、『朝野新聞』一八八六年七月一七日）

外出時の飲食を禁止する法令の制定を報じる記事であるが、外で他者との関わりを減らすことで感染を予防しようとする発想は現代にも共通するものであり興味深い。法令の制定を知らせる記事なので、②「県会・区会・町会等、行政の対応」に関する記事であるといえる。

「八千人に風呂施行　栃木町のコレラ予防対策」
栃木県下都賀郡栃木倭町の大塚総十郎氏は、予て篤志の聞へある人なるが、此程同地方虎列刺予防の事に付、町会を開きたる折にも、種々の方案を提出し、中にも悪疫流行の際には、身体を清潔にすること肝要なれば、市中の湯屋に掛合の上毎日の収入金を見積りて之を町費より支弁し市中老幼男女八千人余を無代償にて入浴せしめんとの議を起せしに賛成者多くして遂に之れに決したりと、同地の報に見ゆ。（『新聞集成明治編年史』第六巻：一八七、『毎日新聞』一八八六年八月一八日）

地方の有力者が、人々の清潔を保つために入浴を推奨し、さらに資金援助により無償での入浴を可能にしたことを報じる記事であり、一見すると防疫策に関する記事に見えるが、これは文末の書きぶりから、地方の報道を見た記者が改めて都市部の新聞にて報じたものだと考えられるので、コレラ関連ニュースの紹介記事、ということで③「コレラ・衛生問題をめぐる世論」に関するものとする。

ここまでは「コレラ」の文言を「コロナ」に換え、現代における新聞に掲載されていてもあまり違和感はない記事であるが、現代の新聞ではまず見られないような記事もある。

「コレラ病の源泉は神田三河町の立ン坊」

立ン坊追払

神田区の虎列刺と云へば、とかく三河町辺に多く出現するは、彼の立チン坊と称する一種の汚穢なる乞食様のもの数多徘徊し居りて、僅かの賃銭を得れば、無暗に五厘で一杯の氷水や附焼き団子をタラフク詰め込み、腹を損ねるもの多きによるとかにて、其筋に於ては巡行の巡査をして、右の立チン坊の群集せざる様注意せしめらるゝ由。（『新聞集成明治編年史』第六巻：一八三、『朝野新聞』一八八六年七月三一日）

「大阪細民移住会議」

前回より屢々報ぜし大坂四区一郡の連合会議即ち大坂細明の移住会議は、本月三日大坂府庁議事堂に於て開場式を行はれたり、其移住の箇所は、（中略）戸数二千七百戸、人口八千百人なり。又此細民を移住せしむる難波村の新築家屋は、前報の如く四区一郡の共有にして居住貧民より一日に付、二坪建の家金五厘、三坪建の家は八厘を賃料として取立てらる。又移住議案説明の大要は左の如し、兎にも角にも此一挙は虎列刺事件中の一大英断、一大美挙にして、大坂府民の為に深く賀せざるを得ず。（下略）（『新聞集成明治編年史』第六巻：一九〇、『東京日日新聞』一八八六年九月九日）

「立ン坊」についての記事は、コレラの感染源を貧困層の不潔感のある人々であると断定的に報じたもので、「大阪細民移住会議」の記事では、貧困層の強制移住を称揚するような文言が含まれている。公的メディアが特定の人々を差別的に取り扱う記事を書いた場合は、現代では発信した記者および企業のコンプライアンス意識が問われる事態になりかねないため、上に挙げたような差別的な記事は現代の新聞では取り扱われない情報であると推測できる。このことは、新聞というメディアの変遷を考える上で重要な要素であるといえる。

三-三　現代の新聞

現代の新聞記事は、今までに挙げてきたような明治期の新聞に比べて記事が長いものが多く、引用の形をとるといたずらに紙幅を費やしてしまうため、記事の掲載日と見出しの紹介のみに留めたい。

現代の新聞記事の傾向として、とにかく扱う情報の幅が

広いということが挙げられる。感染症に関する記事に限定しても、政治の動向、経済における影響、市民生活における影響、感染症対策に関する情報共有など、実に多様なスケール感で、感染症が猖獗を極める社会の様子を描き出している。以下に、新型コロナウイルスが国内で猛威を振るい始めた二〇二〇年四月の読売新聞および朝日新聞の記事タイトルを一部紹介する。

○読売新聞

・二〇二〇年四月二日社説「日銀三月短観　さらなる悪化に備えた対策を」
・二〇二〇年四月五日「ワクチン開発短縮、世界の製薬大手が続々挑む…早ければ『一年』」
・二〇二〇年四月七日「新型コロナ、症状の有無にかかわらずマスク着用を」
・二〇二〇年四月八日「友との再会喜ぶ、中学で卒業式と終業式…鎌倉学園」
・二〇二〇年四月九日【緊急事態宣言　専門家に聞く】「自粛継続　犠牲抑える…東京慈恵医大教授　浦島充佳氏」
・二〇二〇年四月一〇日社説「テレワーク　上手に活用し密集を避けよう」
・二〇二〇年四月一三日「ECMO治療受けた重篤患者、少なくとも七五人…二週間でほぼ倍増」
・二〇二〇年四月一七日「プロ野球、セ・パ交流戦を中止…五月中の開幕も断念」
・二〇二〇年四月一九日「ネットで飲み会、懇親会」
・二〇二〇年四月二一日「疫病封じる妖怪『アマビエ』が和菓子に…岐阜・大垣」
・二〇二〇年四月二五日「全国の学習塾　八割が休校…コロナ感染拡大」
・二〇二〇年四月二八日「『味がしない』『急激に悪化』『無症状でも陽性』…感染者の証言集」
・二〇二〇年四月二九日「マスク着用しない客ともみ合い、警備員が発砲…流れ弾が女性店員の首に命中し死亡」

国の経済状況に関する記事から、感染症に関する最新情報、専門家の見解や、市民生活や娯楽に関する記事、地方のちょっとしたニュースまで、実に幅広い内容を扱っている。四月二九日の記事は海外のニュースだが、国外の内容までもを取り扱うこともある。

○朝日新聞

・二〇二〇年四月二日朝刊「一世帯二枚ずつ、政府が布マスク　新型コロナ」
・二〇二〇年四月三日夕刊「感染加速、世界一〇〇万人　コロナ死者五万人」

・二〇二〇年四月五日朝刊「一〇代の死、欧州の教訓　新型コロナ、持病なくても重症化」
・二〇二〇年四月七日朝刊「きょう緊急事態宣言　東京・神奈川・埼玉・千葉・大阪・兵庫・福岡　五月六日まで想定」
・二〇二〇年四月九日朝刊 天声人語「コロナによる働き方改革」
・二〇二〇年四月一四日夕刊「休止中の展覧会、『ニコ美』で配信【大阪】」
・二〇二〇年四月一五日夕刊「感染症扱う小説や歴史書に注目　カミュ『ペスト』一五万部増刷」
・二〇二〇年四月一六日夕刊「（新型コロナ）演劇も音楽も、テレワークで届ける」
・二〇二〇年四月一七日朝刊「世論の不満、折れた首相与党に転換迫られ　一〇万円給付へ　新型コロナ」
・二〇二〇年四月一八日朝刊「（いちからわかる！）新型肺炎が悪化したら、どんな治療を受ける？」
・二〇二〇年四月二〇日朝刊「（声）市民が市民を責める、違うのでは」
・二〇二〇年四月二四日朝刊「景気判断『急速に悪化』　リーマン後以来　四月・月例経済報告」
・二〇二〇年四月二五日朝刊「一〇万円『DV被害者は月内申し出を』　遅れると世帯主に支給の恐れ」
・二〇二〇年四月二六日朝刊「病床、逼迫の恐れ四都道府県で利用八割超　朝日新聞社調査【大阪】」
・二〇二〇年四月二七日朝刊「全国高校総体、初の中止」
・二〇二〇年四月二八日朝刊「一二〇万本、ひっそり　ネモフィラが見頃　福岡【西部】」

読売新聞と同様、多岐にわたる情報が含まれていることがわかる。隅付き括弧で【大阪】などと付記されているのは、地域限定の記事である。全国共通の記事に加えて地域限定の記事が存在することで、取り扱う情報の幅はさらに重層的になっている。四月二〇日の「声」と題がついた記事は市民の声を紹介したものであり、又新日報における「寄書」欄と同様のものであるといえる。

現代の新聞と明治期の新聞の最大の差異は、やはり取り扱う情報のバリエーションである。現代の新聞は全国からの情報を掲載することができ、恐らくは情報を収集する記者の絶対数も人口増加に付随して増加していると考えられるため、各専門部が幅広いジャンルの記事を手掛けることができる。本稿の二章で確認したように、現代の新聞は多様な情報を継ぎ接ぎしたような形をとっているが、上に挙げた記事の例を見ると、確かに雑多な情報が入り混じる新聞の在り方を知ることができる。ただし、全国紙ではなく地方限定で発行されている新聞などは事情が異なる可能性

があるため、さらなる検討を要する。

四　まとめ

ここまでで検討した明治期および現代の新聞の性質についてまとめるにあたって、「マス・コミュニケーション」すなわち「マスコミ」というものについて定義を確認しておきたい。露木茂・仲川秀樹によると、マスコミは以下のように定義される。

> マス・コミュニケーションをひとことでいうと、「大衆伝達」である。一般的には、「送り手が不特定多数の受け手を対象に、マス・メディア（テレビ・ラジオ・新聞・雑誌など）を通じて、大量に記号・情報が伝達される過程」と概念化したい。（露木・仲川、二〇〇四：二八）

二章で確認したとおり、新聞というメディアの役割の一つとして、人々の共同体への参入を促し、共同体イメージの確立に貢献するというものがあったが、それはまさに上述のようなマスコミ的情報伝達によって達成される。明治期の新聞では各地域の情報を配置し、現代の全国紙では全国の情報を配置することで、規模感は大きく異なれど、読者共同体の間で共通する情報体系を作り出し、共同体像を共有することに成功しているといえる。この空間的な変化には、情報伝達速度自体の時間的変化が関わっていると考えられる。全国の情報を紙面に配置するためには、全国の情報が一挙に手に入ることが必要条件である。手元の携帯電話で連絡を取り合い、即座に記事内容の打ち合わせをすることができる現代だからこそ、広範な情報を紙面上に掲載することができるのだ。

また、性質の変化というよりはむしろ根本的な差異であるが、明治期の新聞と現代の新聞が扱う記事内容を比較すると、コンプライアンス意識に違いが見られる。現代の新聞において、特定の属性を持った人々をネガティブに描くことは禁忌であり、万が一そのような記事が世に出回ったとすれば、企業は再起不能になるまで非難の声を浴びせられるだろう。

ここで、さらに新しいメディアとして、ＳＮＳというものに注目してみたい。ＳＮＳは、プロフィールなどの公開を前提としたオープンなメディアであり、コミュニティの構築と維持を重要な目的とするものである（河内、二〇二一）。ここでは主にTwitterを念頭に置いているが、なぜＳＮＳに焦点を当てるかというと、現代における新聞以上に人々の情報獲得手段として普及しているメディアであるからだ。コロナ禍におけるＳＮＳを見ると、公的な発

表から市民のとりとめもないつぶやきまで、実に多種多様な発信がなされており、その点では新聞が持つ情報の雑多性と重なる部分がある。また、現代の新聞とSNSの違いとしては、サービス利用者間のコミュニケーションの容易さが挙げられる。新聞は、人々を共同体へ積極的に参入させる引力を持つ一方で、市民間で直接コミュニケーションをとることは容易ではない。しかしTwitterをはじめとするSNSでは、発信者に直接コメントを送ることができる場合が多い。これはむしろ、又新日報の投書欄で見られたような関係性に近く、誰かの発信を見た後で、その発信内容についてコメントする、という説明は両者に当てはまるものである。もちろんそこにタイムラグが生じるか生じないかという違いはあるが、明治期の新聞と現代のSNSに似通った特徴があるというのは興味深い。

文献

安保則夫、一九八九、『ミナト神戸 コレラ・ペスト・スラム―社会的差別形成史の研究』学芸出版社。

朝日新聞、二〇二二、「朝日新聞記事データベース聞蔵Ⅱ」、（二〇二一年九月一七日取得、https://database.asahi.com/index.shtml）。

遠藤知巳編、二〇一〇、『フラット・カルチャー　現代日本の社会学』せりか書房。

河内俊樹、二〇二一、「ソーシャル・メディアの台頭に伴う広告環境の抜本的変化と今日的広告展開に関する考察」『松山大学論集』三三（三）：九三―一二七。

MaLuhan, Marshall, 1964, *Understanding Media: The Extensions of Man*, New York: MxGraw-Hill.（栗原祐・河本仲聖共訳、一九八七、『メディア論 人間の拡張の諸相』みすず書房。）

新聞集成明治編年史編纂会編、二〇一一、『新聞集成明治編年史 第六巻』（一九三六―四〇、林泉社）、国立国会図書館デジタルコレクション、（二〇二二年一月七日取得、https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1920367）。

小学館、二〇一二、「デジタル大辞泉プラス」、Japan Knowledge、（二〇二一年一月七日取得、https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=50910012887 70）。

———、二〇一二、「デジタル大辞泉プラス」、Japan Knowledge、（二〇二一年一月七日取得、https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=50910012895 10）。

———、二〇一二、「デジタル大辞泉プラス」、Japan Knowledge、（二〇二一年一月七日取得、https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=50910012883 60）。

———、二〇一二、「デジタル大辞泉プラス」、Japan Knowledge、（二〇二一年一月七日取得、https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=50910012890 30）。

———、一九九四、「日本大百科全書」、Japan Knowledge、（二〇二一年一月七日取得、https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000214691）。

露木茂・仲川秀樹、二〇〇四、『マス・コミュニケーション論』学文社。

読売新聞、二〇二二、「読売新聞オンライン」、（二〇二一年九月一七

日取得、https://www.yomiuri.co.jp/web-search）。
吉川弘文館、一九七九―九七、「国史大事典」、Japan Knowledge、（二〇二二年一月七日取得、https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30010zz178120）。
――――、一九七九―九七、「国史大事典」、Japan Knowledge、（二〇二二年一月七日取得、https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30010zz445750）。